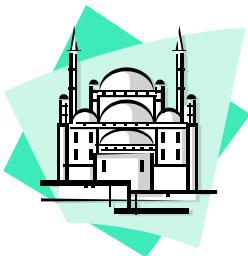


一神教学際研究センター・シンポジウム

# イラク戦争の深層を探る



日 時：2003年5月10日（土）午後2時～5時

場 所：同志社大学 今出川キャンパス 明徳館21番教室



主 催：同志社大学 一神教学際研究センター

CISMOR (Center for Interdisciplinary Study on Monotheistic Religions)

Tel. 075-251-3743 (研究開発推進機構 研究支援課)

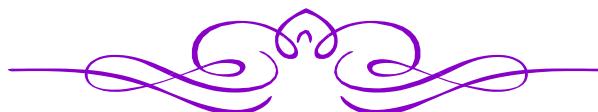
<http://theology.doshisha.ac.jp/cismor/>

# シンポジウムの趣旨

イラク戦争では、従軍記者たちによって、大量の情報がリアルタイムに世界中に伝えられてきました。しかし、あまりに多くの情報が飛び交うとき、現象面にのみ目を奪われ、事態の「深層」を見ることが困難になりがちです。

何が人々を戦争への情熱へと駆り立てていったのでしょうか？ どのようにすれば、暴力への衝動を抑制し、相互の理解を深めることができるのでしょうか？ 21世紀の安全保障を考えていくためのポイントはどこにあるのでしょうか？

このシンポジウムでは、イラク戦争の表層から深層へと潜行しながら、イラク復興や国際安全保障にかかる課題を討論していきます。



## プログラム

司会 小原克博（同志社大学神学部助教授）

1 開会のあいさつ 一神教学際研究センター長 森 孝一

2 講演

- 1)「ブッシュ外交の深層」 村田晃嗣（同志社大学法学部助教授）
- 2)「宗教国家アメリカの深層」 森 孝一（同志社大学神学部教授）
- 3)「イスラーム連帯ヒジハードの深層」中田 考（同志社大学神学部教授）

（休憩）

3 パネル・ディスカッション コーディネーター 小原克博  
村田晃嗣、森 孝一、中田 考



## 講 演 者 の 紹 介

( 講 演 順 )

### 村田 晃嗣（むらた／こうじ）

1964 年生まれ。神戸大学大学院博士課程修了。博士（政治学）。同志社大学法学部助教授。アメリカ外交・安全保障研究専攻。

主なる著書：『大統領の挫折』（有斐閣、1998 年、サントリー学芸賞受賞）  
『米国初代国防長官フォレスター』（中公新書、1999 年）

### 森 孝一（もり／こういち）

1946 年生まれ。バークレー神学大学院連合（Graduate Theological Union）博士課程修了。Th. D.（神学博士）。同志社大学神学部教授。専攻はアメリカ宗教史。

主なる著書：『宗教からよむ「アメリカ』（講談社選書メチエ、1996 年）  
『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身 アメリカ「超保守派」の世界観』  
(講談社文庫、2003 年)

### 中田 考（なかた／こう）

1960 年生まれ。カイロ大学大学院博士課程修了。Ph.D. 同志社大学神学部教授。

専攻はイスラーム政治哲学、イスラーム地域研究。

主なる著書：『イスラームのロジック』（講談社選書メチエ、2001 年）『ビンラディンの論理』（小学館文庫、2002 年）

# 講演レジュメ

## 「ブッシュ外交の深層」 村田 晃嗣

### 1 イラク戦争の意義

湾岸戦争との比較

### 2 アメリカ外交の四つの系譜

ジェファソニアン

ハミルトニアン

ジャクソニアン

ウィルソニアン

### 3 超大国への道程 「神の摂理」か？

逸脱の危険性

アメリカの自己調整能力 「ネオ・コン」再考

同伴者としての日英

海洋国家対大陸国家

### 4 反米気運と秩序形成効果

### 5 日本の役割

基軸としての日米同盟

再建・国づくりと人材育成

### 参考文献

佐々木卓也編『戦後アメリカ外交史』(有斐閣、2002年)

永井陽之助「解体するアメリカ」永井『柔構造社会と暴力』(中公叢書、1971年)

# 「宗教国家アメリカの深層」 森 孝一

## 1. ブッシュと神

Newsweek 2003.3.10 「ブッシュと神」

## 2. 「宗教国家」アメリカの現状

「あなたにとって、宗教は重要か？」

イスラーム 9ヶ国 72% アメリカ合衆国 86%

アメリカの宗教人口

プロテstant教徒：約60%、カトリック教徒：25%、ユダヤ教徒：2%、モルモン教徒：2% = ユダヤ・キリスト教的伝統：約90%

保守派とリベラル派

アメリカ人口の40%は「福音派」(Evangelicals)と呼ばれる保守派

アメリカを二分する「文化戦争」(Culture War) 最大の争点としての人工中絶。

一国主義と国際協調主義 アメリカ中心主義と多文化主義

## 3. 宗教右派とは？（『宗教からよむ「アメリカ』』201頁以下参照）

宗教右派の実力

人口の18% 確実に投票し、選挙活動を積極的に行う人びと。

アフリカ系アメリカ人（黒人）の1.5倍 創価学会・公明党の2倍

与党共和党内の最大勢力

宗教右派の主張点

世俗的人間中心主義（humanism）批判

伝統的な家庭を守る（pro-family）

アメリカ至上主義（反共主義 反イスラーム）

## 4. 「ネオ・コン」と宗教右派の一致点と相違点

## 5. イラク戦争の「大義」

自国の安全の保障。「対テロ戦争」の戦場はアメリカ本土である。霸権の維持。

アメリカの建国の理念であり、アメリカ文明の中核である共和制・自由を世界において実現すること（普遍主義、グローバリズム）

## 6. イラク戦争が宗教に投げかける課題

悪の現実を宗教はどのようにとらえるか。「外なる悪」と「内なる悪」

## 資料：イラク戦争の大義としての「自由」と「神」

### 資料1

イラク国民を含め人々が自由を欲するのは、ブッシュ・ドクトリンでもアメリカン・ドクトリンでもない。神から与えられたドクトリンだ。（2003年4月9日、フセインの銅像が倒されるのをテレビで見たときのブッシュ大統領の言葉）

### 資料2

自由を与えるのはアメリカではなく、神である。（2003年3月26日、フロリダ州タンパの空軍基地でのブッシュ大統領の演説）

### 資料3

アメリカへの攻撃は、アメリカを国家として成立させている理想に対する攻撃であった。その理想とは「自由と平等」であり、それが存在しているかどうかが、いま戦っている敵とアメリカとの最大の相違である。この自由と平等を私たちに与えたのは創造主である。この文明を大量破壊兵器によって危うくするテロリストを決して許さない。正義が行われ、国家の安全が保障されるまで、手を緩めることはない。私たちはイスラームの信仰を尊重する。しかし、その信仰を歪めて行動する者に対して、私たちは戦う。私たちは、いまこの時、神が私たちを一つにしてくださることを知っている。今夜、ここで祈り求めることは、神が私たちに目を注ぎ続けてくださることだ。私たちの国家は強力である。しかし、私たちの大義は国家よりも偉大である（Our cause is even larger than our country）。その大義とは、人間の尊厳であり自由である。このアメリカの理想はすべての人類の希望である。これらを得ようとする希望が、何百万人もの人びとをこの港に引き寄せた。希望の光は、今なお、私たちの道を照らしている。光は闇のなかで輝いている。そして、闇は光に勝つことはない。神よ、アメリカを祝福したまえ。（「9.11」一周年のブッシュ大統領演説・要約）

### 資料4

すべての人間（all men）は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。（「独立宣言」）

## 中田 考「イスラーム連帯とジハードの深層」

イラク戦争は一義的にはアメリカとイラクの間の紛争である。つまりそれは西欧文明に起源を有する近代国民国家システムが産みだした問題であり、文明間の対立ではない。そのことは(1)西欧文明の内部でのアメリカとフランス、ドイツの対立、(2)アメリカが(日本を含む)帝国主義列強の中で歴史上イスラーム世界において植民地支配を行ったことのない唯一の国であったこと、(3)サッダーム体制のイラクがイスラーム世界の中でも最も反イスラーム的な世俗国家の一つであったことなどからも明らかである。しかし他方でイラク戦争がイスラーム世界全域において、イスラームに対する戦いとみなされ、ジハードが唱えられ、義勇兵が募られたこともまた事実である。イラク戦争を「文明の対立」と短絡してならないが、逆にそれを単なる二国間紛争と考えることも事柄の本質を見誤ることになる。

現代世界は、西欧文明が植民地支配によって国民国家システムを世界中に強制したことによって成立したが、西欧文明のローカルな歴史状況の産物に過ぎない国民国家システムを社会構成、政治文化の全く異なる文明圏に強制したことは世界各地に大きな禍根を残した。イスラーム世界も旧宗主国による押し付けの国民国家システムによって分断されたが、民族と領域によって人類を分断する国民国家システムはイスラーム的世界観と真っ向から対立するものである。

イスラームは神法(シャリーア)以外には地上にいかなる権威を認めず、したがって国家に忠誠を捧げることは許されず、また民族、人種による人類の分断も「血縁主義(アサビーヤ)」「党派主義(ジャーヒリーヤ)」として厳しく拒絶する。イスラームは民族、人種を超えて神法が支配する地を「イスラームの家」、神法の支配の政治体制を「カリフ制」、そしてこの「イスラームの家」と「カリフ制」を護るための戦いを「ジハード」と呼ぶ。ところが「カリフ制国家」、即ち「イスラームの家」は理念的に普遍的であり单一不可分であるため、現在のイスラーム世界において「イスラームの家」の再統一、「カリフ制」国家の再興を目指すイスラーム運動は、植民地遺制たる域内の国民国家システムの支配者たちという内なる敵と、アメリカを筆頭とする新植民地主義諸国という外敵という二つの敵に直面していることになる。

通常はこの二つの敵が共闘してイスラーム運動をほぼ完全に封じ込んでいるため、イスラーム運動の実態は外部からはほとんど観察できない。ところが両者が仲間割れを起こしたのが今回のアメリカによるイラク侵攻であり、この共闘の裂け目から、両者と戦うイスラーム運動のジハードの姿の一端が垣間見られたのである。

# 「一神教学際研究センター」について

CISMOR (Center for Interdisciplinary Study on Monotheistic Religions)

一神教学際研究センターは、文明の共存と国際安全保障を実現するために、一神教に関する学際的・総合的研究を行っています。

日本における一神教受容は歴史が浅く、未だに一神教の理解は十分なものではありません。にもかかわらず近年では対象の十分な理解を欠くままに、平和と共存の原理である多神教に基づく日本文明を、独善と争いの元となる一神教文明に対する解決策とみなす安易な議論が罷り通る傾向があります。本センターは、実証的な一神教研究によって、一神教の本質を明らかにすると同時に、その対立概念としての多神教概念への反省も迫り、日本文明の自己理解にも貢献することを目指しています。

欧米とイスラーム世界の対立抗争の歴史は、両者にユダヤ・キリスト教とイスラームの対立の相を際立たせ、一神教としての統一的把握を妨げさせてきました。その意味において、歴史的しがらみから自由な「外部」に位置し「中立的」「客観的」な研究が可能な日本から、一神教研究を発信する意義はきわめて大きいと言えます。特に9.11以降顕在化した「文明の衝突」状況において、日本は国際的にも欧米とイスラーム世界の仲介者の役割を期待されていますが、仲介の成功には、まず一神教の正しい理解が必要です。

戦後の日本はアメリカをモデルとする国づくりを目指し、アメリカは日本にとって最も重要な同盟国であり、また日本は政治・経済・社会・文化のあらゆる側面において圧倒的な影響を受けてきました。ところが日本のアメリカ理解におけるウィーク・ポイントが宗教であり、アメリカが世界でも最も宗教的（=ユダヤ・キリスト教的）な国であり、その行動原理が一神教の論理に深く規定されていることは十分に認識されていません。グローバリゼーションの名の下における「アメリカ化」によって9.11以降の世界におけるアメリカの影響力の拡大が加速化されている現在、一神教研究としてのアメリカ研究は日本の進路を定める上でも大きな意義を有すると考えられます。

以上のような目的を遂行していくために、一神教学際研究センターは、今後、様々なプログラムを企画し、世界に向けて積極的な情報発信を行っていく予定です。

## 「一神教学際研究センター」研究員一覧

森 孝一(センター長)	神学研究科・教授	アメリカ宗教史
小原 克博	神学研究科・助教授	キリスト教思想
石川 立	神学部神学科・助教授	新約聖書学
越後屋 朗	神学研究科・教授	ヘブライ語聖書学
中田 考	神学研究科・教授	イスラーム学
四戸 潤弥	神学研究科・教授	イスラーム法
富田 健次	神学研究科・教授	現代イラン研究
アダ・コヘン	同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー	ユダヤ教研究
中山 善樹	文学研究科(哲学および哲学史専攻)・教授	中世キリスト教神学
村田 晃嗣	法学研究科(政治学専攻)・助教授	国際関係論
山本 雅昭	言語文化教育研究センター・教授	ユダヤ文学
バーバラ・ジクムンド	アメリカ研究科(アメリカ研究専攻)・教授	アメリカ宗教史
細谷 正宏	アメリカ研究科(アメリカ研究専攻)・教授	安全保障論
臼杵 陽	同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー (民族学博物館地域研究交流センター・教授)	中東地域研究
廣岡 正久	同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー (京都産業大学大学院法学研究科・教授)	ロシアの政治と宗教
三浦 伸夫	同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー (神戸大学大学院総合人間科学研究科・教授)	科学史
田原 拓治	同志社大学研究開発推進機構・客員フェロー (東京新聞記者)	イスラーム地域研究

## 「一神教学際研究センター」を拠点とした研究構想

